



(Photo: 浅野カズヤ)

来賓挨拶



京都府副知事 山下 晃正 氏

関西文化学術研究都市推進機構  
理事長 柏原 康夫 氏

基調講演



テーマ

## 沈みゆく大国アメリカからの警告

～未来への選択～

講師 堤 未果

ジャーナリスト・作家

ジャーナリスト、東京生まれ。NY市立大学大学院で修士号取得。国連、NGO、米国野村證券を経て現職。『ルボ貧困大国アメリカ』はシリーズ71万部のベストセラーに。最新作『沈みゆく大国アメリカ』シリーズも25万部を突破、ほか著書多数。NHK『マイあさラジオ』レギュラーなど各種メディアでの出演も多く、執筆・講演など幅広い活動を続けている。

宝物をもっていても、その価値に  
気づかなければ簡単に奪われる

何でも商品にして、株式会社化して、すべてを株主利益の数字で計って、数字にならないものは切り捨てていくことが、本当に人間にとって幸せなのでしょうか。

今世界では、一部の人の「強欲資本主義」が世界中に市場を広げようとしています。その中心であるアメリカの現場をしっかりと見た上で、日本は慎重に今後の方向性を決めて欲しいと思います。例えば、世界から絶賛されている国民健康保険は、私たち日本人の多くにとって、もう空気のような存在になってしまっています。でも素晴らしい宝物を持っていても、手にしている本人がその価値に気づいていなければ簡単に奪われてしまう。今最速で高齢化する日本の医療・介護が、100兆円市場の優良ビジネスとして、世界中から狙われていることをどれほど的人が知っているでしょうか?国民健康保険制度を崩してそこから参入したい人たちが沢山いるのです。私たちが当たり前だと思って無関心でいたら、あっという間に変えられてしまいます。アメリカもそうでした。国民が無関心だったことで、多くの制度を次々に、合法的に奪われてしまったのです。私の国日本には、同じ過ちを犯してほしくない。世界に誇る日本の宝、国民健康保険を守りなさいというのは、私の父の遺言でした。

人間として幸せに生きられる社会が、  
今真剣に問われている

人間にとって本当に幸せなものは何か。人間の未来は何を「ものさし」にしていくのか。最も効率よく利益を出す方法は、人間を数やデータにすることだと言った、ある大企業幹部がいます。多様性はないほうがいい。一人一人顔がある個人としてはなく、人間を物として仕分けていく。文化、伝統、通貨、言語、様々な価値観が共存していると効率が悪いからだと。みんな画一化して、会社もどんどん吸収合併して、本当に少ない数の会社が業界を牛耳って、全部傘下に入れていいばいい。無駄がなく、利益もあがる、株主も喜び、経営幹部の報酬もあがる。でもいったい誰の為に?私たちはモノでもないし、数字でもありません。一人一人名前があり、生きてきた歴史があり、子供たちを慈しみ、将来の夢があります。かけがえのない個人が、本当に人間として幸せに生きられる社会。アメリカ人だけでなく私たち日本人も、今真剣に問われているのです。いったいどちらの社会を、子ども達に残したいですか?と。



2015年3月12日(木)  
けいはんなプラザメインホール  
参加者:約660名  
共催  
京都府、関西経済連合会、  
京都商工会議所、公益財団法人関西  
文化学術研究都市推進機構  
後援  
国立国会図書館関西館、大阪府、  
奈良県、生駒市、木津川市、京田辺市、  
精華町、奈良市、大阪大学、  
大阪国際大学、大阪電気通信大学、  
関西外国语大学、京都大学、  
同志社大学、同志社女子大学、  
奈良女子大学、奈良先端科学技術大学院大学、立命館大学、大阪商工会議所、奈良商工会議所、(株)けいはんな、  
京都銀行、南都銀行

人類と地球が直面している諸課題は、グローバリゼーションによる国や地域の特性を考慮しない画一化の進展と、地球の有限性や人知の限界を考慮しないまま「成長」と「競争」を継続したことに起因しています。「人類の平和的・持続的共存」という考え方への転換に向けて、今私たちは何をなすべきでしょうか。



## 人・幸福・未来

### パネリスト

#### パネルディスカッション



#### テーマ

# 人類・その超えるべき課題の先の未来



## どれだけの自然資本から、 どれだけの幸せを作るかが重要

有限資源の地球で、平和的な共存をしていくためにはどうしたらよいかという問い合わせ、「文化、芸術、人文学は万能ではないが、無力でもない」と大原氏は訴えました。他者を理解することをコンセプトとするケ・ブランリー美術館のように、世界のあらゆる異文化を理解しようとすることが大事ではないかと問いました。「どれだけの資本からどれだけのモノが出来るかではなく、どれだけの自然資本からどれだけの幸せを作るかが重要」だとする枝廣氏は、自然が壊され人々が幸せにならないのに、これまでどおりの経済成長を追い求めて本当に良いのかと問題提起しました。世界の異常気象と二酸化炭素問題について言及した黒木氏は、「エネルギーを節約することは、結局はエネルギーを生産する事に繋がる」と主張しました。村上氏は「人間の生命こそが最大の価値の一つであるが、その価値自体が、文明が成長し、科学による延命技術が発達すると、自分達が本来もっている価値観に抵触してしまう」と言い、「それをどう乗り越えるか議論して問題を共有しよう」と訴えました。有本氏は「討論をすることによって新しいものが生まれてくる、人間の新しい資質も生まれてくる」というハイゼンベルクの引用と共に、「みんなと一緒に語り行動する仕組みを作ろう」と呼びかけま



した。日本の歴史学を専門とする笠谷氏は、「自然との共生、自然に身を任せるという日本の価値観が、GDP至上主義に代わる新たな価値基準の構築に資する」と訴えました。

## 文化・芸術などの人文社会系の知を どう社会に取り込んでいくか

地球上の資源が有限であるという認識のもとに、どうすれば持続可能な社会を築いていくのか、そして多様な文化や価値観をもっている社会がいかに平和的に共存していくのかという観点から、レジリエンスの重要性が指摘されました。レジリエンスとは「しなやかな強さ」と訳されることもあり、竹のようにしなやかに折れない力を指します。レジリエンスを創り出す要素として、多様性、モジュール性、フィードバック機能の3つが必要とされています。想定外のことが起こってもすぐに立ち直れるような力をつけておくという考え方です。そのとき、文化・芸術をはじめ人文社会系の知をどう社会に取り込んでいくかが重要となるでしょう。科学技術イノベーションのみ切り取られ、声高に呼ばれる今日の風潮に対して、私たちの住む多様な社会をいかにより良くしていくかということを皆で考えること、常に自分の価値観をリフレッシュしながら行動パターンを変えていくことが、社会の力を強めることにつながります。東日本大震災という自然災害を経験した日本に対して、諸外国からは新しい価値観や哲学が日本から発信されるのではないかと期待されています。私たちの伝統文化を背景にしたこれからの社会のあり方、今日の持続不可能な社会から乗り換える船を早く作る行動、最初は小さい動きかもしれませんのが地域レベルから始めることが大切です。



### 有本 建男



政策研究大学院大学教授・科学技術振興機構  
研究開発戦略センター副センター長  
専門は科学技術政策、研究開発ファンディング・システム。科学技術基本計画など科学技術政策の策定と実施に長年参画。

### 枝廣 淳子



東京都市大学教授・  
幸せ経済社会研究所所長  
GDPだけでは測れない地域の幸せを高めて  
いく考え方の枠組みや持続可能な社会・経済  
会のあり方について研究。

### 大原 謙一郎



公益財団法人大原美術館 理事長  
倉敷レイヨン(現・クレラ)副社長、株式会社  
中国銀行副頭取、岡山経済同友会代表幹事、岡山県教育委員会教育委員などを歴任。

### 笠谷 和比古



国際日本文化研究センター研究部教授・  
伝統文化総合研究プロジェクト長  
専門は歴史学(日本近世史、武家社会論)。  
近世の国制と天皇制、武士道の思想と行動  
形態を研究。

### 黒木 登志夫



日本学術振興会  
学術システム研究センター 相談役  
専門はがんの細胞生物学。1970年、試験管  
内発がん実験成功により第4回高松宮妃癌  
研究基金学術賞受賞。

### 村上 陽一郎



東京大学名誉教授・  
国際基督教大学名誉教授  
専門は科学史・科学哲学。安全学を提唱。安  
全を求める人間の営みを統一的に把握する  
試みを続ける。

### コーディネーター



### 長尾 真

京都大学名誉教授・  
京都大学元総長  
専門は自然言語処理・画像処理・パターン認  
識。情報処理分野の先駆的貢献者。

所属・役職はフォーラム当時のものです

文責：高等研事務局